大倉山メディカルクリニック
院長

山本伸

PICK UP
THE PERSON

KEY WORD

寄り添う
— yorisou —

神奈川県にある、『大倉山メディカルクリニック』の山本院長は、
これまで外科医として、がんを含む様々な疾患に携わってきた。
そんな院長が独立を決意したのは、「患者さんに寄り添うため」である。
多様なライフスタイルが尊重されている昨今において、
患者の肉体的、精神的、社会的な苦痛をケアすることで、
その人らしく生きられるようにと、緩和ケアを実践している。
たとえ重篤な病を発症しても、それまでと変わらぬ生活の質を保てるように——
そうして患者に寄り添って心身をサポートしながら症状改善を目指していく。

「患者さんに寄り添うこと
その姿勢は崩したくないですね」

© 2019 USP-Management Co., Ltd.

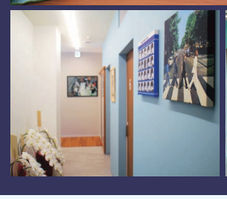
気持ちに寄り添い、想いに応える

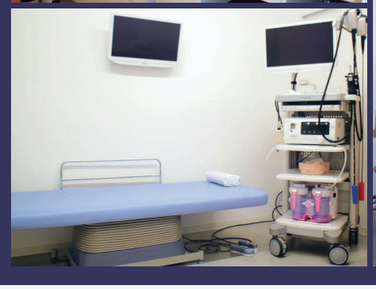
診療時間	月	火	水	木	金	土
09：00〜12：30	●	●	●	休	●	●
15：00〜18：30	●	●	●	休	●	休

※【受付時間】午前 8:30-12:15 ／午後 14:30-18:15
【休診日】木曜・土曜午後・日曜・祝日

大倉山メディカルクリニック

神奈川県横浜市港北区大倉山 3-41-22 1F
URL：https://www.ookurayama-mc.com/
内科／消化器内科／肛門外科／内視鏡内科・内視鏡外科／外科など





院長
山本 伸

患者に寄り添う姿勢を崩さない 腕利きの医師が目指す治療とは

2019年5月に開院した注目の『大倉山メディカルクリニック』。同院の山本院長は、長年外科医として活躍。様々なオペを経験し、同院を開院した。診療科目の多さと共に、大学病院ともしっかり連携が取れており、サポート体制は万全だ。そんな地域医療の一翼を担う院長のもとをタレントのダンカン氏が訪問。インタビューを行った。

——まずは山本院長の歩みから順を追って伺います。

東京都・目黒区の出身です。中学から大学までラグビーに熱中していましたね。医者を目指したのは、代々医者の家系でしたし、親戚にも多かったので自然の流れでという感じでしょうか。高校を卒業し、『東京医科大学』に進学。卒業後は『東京女子医科大学消化器病センター』の外科に入局しました。外科医として、がんを含む様々な悪性腫瘍の治療・手術や、生体肝移植など、これまで多くの疾患に携わってまいりました。そして、2019年3月に退局。同年5月に『大倉山メディカルクリニック』を開業しました。

——元々開業はお考えでしたか。

考え始めたのは3年ほど前からですね。それまでは、ずっと外科手術に携わっており、忙しい毎日で考える余裕もありませんでした。そうした中で、もっと患者さん一人ひとりに寄り添っていきたいと思うようになりました。それと共に、家族との時間を大切にしたいとも考えるようになり、開業したんです。ちなみに両親は栃木県で開業しておりまして、ゆくゆくは一緒に働きたいと思っております。

——人と向き合うお仕事ですから、精神的に厳しい場面もありましたでしょう。

ええ。ただ、これまで多くのがん患者さんと向き合ってきたことで、得たことも多かったです。がんというのは完治しますが、一方で3人に1人が亡くなる病でもあります。がんというのは痛みはもちろん、吐き気やダルさなどの身体的な苦痛はもちろん、命を脅かす病に直面することで、落ち込み、悲しみ、苛立ちなど、大きな精神的ダメージも与えてきます。ですから、様々な考え方があるのは承知していますが、私は緩和ケアで患者さんを助けたいと思っています。

——緩和ケアですか。

ええ。業界的に見ても、「がんを治す」ことばかりに関心が向けられ、患者さんのつらさに対する充分な対応がこれまでできていなかったように私は感じています。もちろん、完治することが結果的に良いことなのは間違いありません。ただ、治療を続けるのには、先ほどお話しした身体的・精神的な苦痛はもちろんのこと、仕事関係や金銭面の社会的苦痛、人生の意味について考える、スピリチュアルペインなどもあります。そうした様々な苦痛がある中で常に気力を保ちながら治療に臨むことは非常に難しいこと。ですから、一人ひとりの症状や価値観を把握した上で、治療と並行しながら痛み止めの薬をはじめとした、苦痛を和らげる緩和ケアの提案・サポートを積極的に行っています。そうしたサポートを通じて、病気だと分かる前と変わらないような生活の質（Quality of Life）を保てるように、支援したいですね。

また、患者さんは当然つらいですが、そのご家族も患者さんと共に闘っているわけですから、気付かないうちに疲弊しています。実際「本人が頑張っているのにもかかわらず、私たちが苦しいと思ってはいけない」とお考えのご家族もいらっしゃいます。しかし、患者さんを支えるためにもご家族の健康は必要不可欠。治療費などが嵩み、様々なご苦労が絶えないかと思いますが、少しでも気持ちが楽になるように、私共もアドバイスできることがあると思いますから些細な悩みも話してほしいです。

——患者さんと共にそのご家族のことも考えられているのですね。他にも経験を活かした診療をされているのですか。

ええ。身体に不調が見られた際に、いつでも気軽に頼っていただけるよう、内科・外科から胃や腸を専門とする消化器内科、痔などのお悩みに応える肛門外科、さらに、内視鏡を使用した各種精密検査まで、幅広く対応しております。特に私の専門は、消化器科ですから、食道から肛門までを総合的に診断できます。当院では、できる限り患者さんに苦痛なく、楽に検査を受けていただけるよう、鼻から挿入する経鼻内視鏡を導入。他にも胃・大腸カメラ共に眠ったような状態で受けていただける鎮静剤も使用しています。また、それらの検査を受ける環境、たとえば内視鏡室も完備していますし、万が一、重篤な場合でも、大学病院とも連携が取れております。そのため、気になる症状は何でもご相談下さい。

——院長とお話しさせていただいて、お考えや、その幅広い診療科目からは患者さんに寄り添いたいという想いを感じますね。

ありがとうございます。ただ、患者さんの中には、本来クリニックに来なければならない状態なのに、何かしらの要因があって、クリニックに来られない方々がいるんです。すぐには無理かもしれませんが、患者さんに寄り添っていくことで、徐々に来られない理由である障壁を取り除いていき、クリニックに来てもらえるようになれればと思っています。

——院長の人間味が伝わってきます。最後にこれからの目標をお聞かせ願えますか。

開院したばかりなので、まだ実現できていませんが、ゆくゆくは、在宅診療なども行い、高齢などでクリニックに通えない人々の助けになりたいですね。そうしてこれからも患者さんに寄り添う姿勢を崩さず、地域に根差していき、地域の人を幸せにしていきたいです。

——本日はありがとうございました。これからのご活躍を応援しております。

●ゲストインタビュアー
ダンカン
（タレント）

「内装はブルーを基調とした落ち着いた雰囲気でした。また、ビートルズや高倉健氏の写真が飾られているなど、我々世代にとって喜ばれる仕掛けがたくさんされていまして、きっと地域の方々にも喜ばれると感じましたね。これからも、患者さんに寄り添う姿勢を貫いて、一人でも多くの患者さんを救っていってほしいですね。陰ながらではありますが、応援していますよ」

© 2019 USP-Management Co., Ltd.